

新世界シアターコンプレックス

1190055 川端優介

指導教員 吉田晋

高知工科大学 システム工学群 建築都市デザイン専攻

1. はじめに

私の出身地である大阪府大阪市は、近畿・西日本の中心地で多くの繁華街や歓楽街で栄えている。その中でも今回対象とした地域は浪速区恵美須東だ。ここは新世界と呼ばれている。本設計では新世界にある劇場を対象に考える。

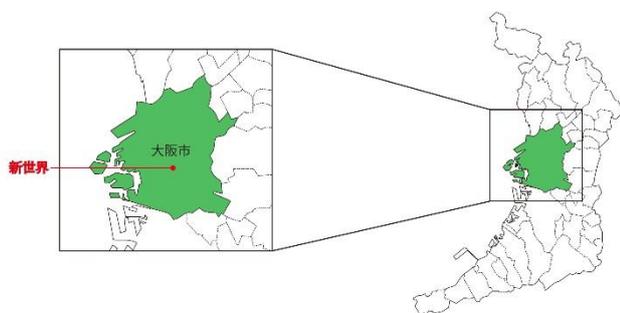


図1 対象地域の位置

2. 対象敷地

対象敷地は、大阪市浪速区恵美須東（新世界）に位置する通天閣の南東付近とする。

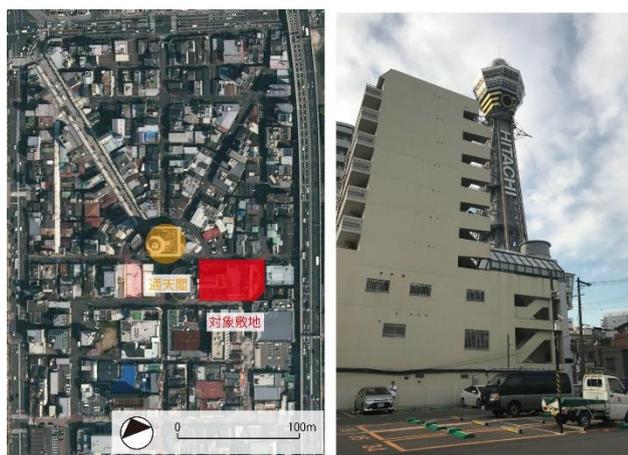


図2 対象敷地の位置 写真1 対象敷地から見た通天閣
(国土地理院の航空写真に
対象敷地を追記して記載)

3. 新世界の歴史

1912年に初代通天閣とルナパークが開業され、ルナパーク内には活動写真館や大衆演舞場があった。これらは現在でいうところの映画館や大衆演劇場だ。しかし、ルナパーク自体は1923年に閉演され、その名残として劇場は残っていった。

その後は大阪万博開催に向けた労働者の募集などで「労働者の街」という印象が強くなった。

4. 現状

現在は新世界グルメやレトロな街並みが人気で、週末になると外国人旅行者や現地の人々で賑わっている。しかし敷地付近にいくつか残っている劇場には、新世界全体の賑わいに比べて人通りが少なく、近寄りやすい雰囲気が漂っていた。



写真2 現存する映画館 写真3 現存する大衆演劇場

また新世界には「雑然として怖い」というイメージがあると感じた。この雑然とした雰囲気は新世界の一部であり、日雇い労働者で賑わう風景も新世界らしい街並みの一つだ。

5. 提案

元々ある新世界の労働者の賑わう場と劇場を支える人々の文化を複合させる拠点を提案する。

劇場は、現在もある映画館・大衆演劇場に加えて、現代的な演劇を行う演劇場を複合した、劇場

文化の拠点とし、演劇ファン、映画ファンがお互いの劇場に興味を持つきっかけとなるであろう。

また、この建物に新世界グルメの店舗を設け、労働者の賑わう場も複合させる。

6. 設計

6-1 方針

劇場を支える人々と楽しみに来る人々が集まる棟と、労働者が集う新世界グルメの店舗が集まった棟に分ける。建物間に出来た道を通して公演中・公開中の作品を知ることができ、中の賑わいを感じることが出来る空間とする。

6-2 内容

1階に大衆演劇場、2階に新演劇場、3階に映画館、さらに屋上に屋外劇場を配置する。

演劇場には幕間の休憩や交流に使ってもらう広

いホワイエをつくる。ホワイエの形は1、2階で違う。また3階の映画館は2つのスクリーンが飛び出している。これらは外観のでこぼした見目をつくり、雑然さを表現している。

劇場関係者や、演者の方も労働者として賑わえるように新世界グルメの店舗は各階に設けた。

建物間にできた道は、建物のガラス越しに中を見られるようにし、壁にはその時公演・公開中の作品の掲示がされ、ただ通り抜けるだけではなく劇場に興味を持てるようにした。

7. まとめ

本設計では、さまざまな劇場が複合された拠点と労働者の賑わう場を計画した。新世界らしい雑然なイメージを外観で取り入れつつ、劇場文化と労働者で賑わう場を複合した設計ができた。

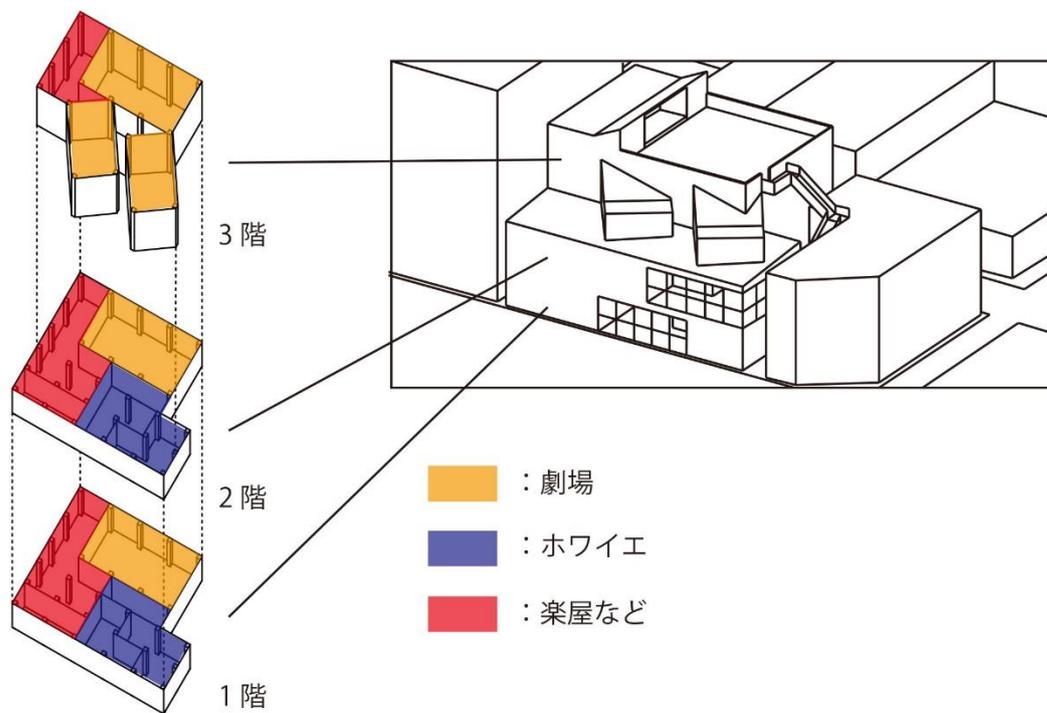


図3 アクソノメトリック図